The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エスニック・リバイバルに関する一考察
Author(s)	秋庭, 裕
Citation	年報人間科学. 1988, 9, p. 47-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6044
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部（一九八八年三月）
『年報人間科学』第九号四七頁―六四頁

エスニック・リバイバルに関する一考察

秋庭裕

エスニック・リバイバルに関する一考察

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　エスニック・リバイバルとは何か
Ⅲ　エスニシティのダイナミズム
Ⅳ　エスニシティと運動
Ⅴ　まとめにかえて

Ⅰ　はじめに

一九五〇年代末から六〇年代初め以降、西欧先進諸国をはじめ第三世界諸国にいたるまで、また体制の如何を問わず、全世界的規模でエスニシティ（ethnicity）をめぐる問題が噴出している。しかし、これまでわが国は「単一民族国家」という神話に貫かれ、エスニック（ethnic）な多元性・異質性についてあまり敏感ではなかった。この数年来エスニシティを問題とする日本語の文献も増加してきたが[1]、今日のように「国際化」が強く要請され、ポスト・モダンと表現される新しい質の時代を生きるためには、私たちも全世界をおおうエスニックな現象の高まりにより注目しなければならないだろう。

今日のエスニシティに対する関心の高まりは、何よりもエスニック・リバイバル（民族の復活・活性化）に対する一種の驚きに導かれている。つまり近代化・産業化の進展に伴ない消滅したり、例外的に残存したりするにすぎないと考えられていたエスニシティが、逆に復活・活性化し様々な紛争の契機となっていることに対する驚きである。三〇年前には、エスニシティの重要性とその復活・活性化の見通しは否定的にしか語られなかった。ところが今日地球上のいたるところで、人々は世界が多元的であることを認識することを求められ、いわゆる「ネイション・ステイト」がほとんど名ばかりのものであることを認めなければならない事態に直面しているのである。実際、民族的[2]に均一の人々によって構成されている国家は非常に稀なのである。また、社会学・人類学上の理論的見地からしても、エスニック・リバイバルとエスニック・コンフリクトの噴出は予想を裏切るものであった。社会学における予想の失敗は、この時期の支配的パラダイムであった構造―機能主義の性格に内在するものである。構造―機能主義は、社会システムの安定を至上として、行為における規範的要素をとりわけ強調し、均衡状態にある

システム内の秩序化された諸過程を重視した。それは、結局、当該システムの存続をめぐって機能要件分析に焦点を定めることから、安定、合意、同調、適合などに注目するあまり、コンフリクトや変化・変動を充分にとらえることができなかったのである。新しい質のエスニシティの生成はこの空隙に生じたのである[3]。他方、コンフリクトを重視してきたマルクス主義社会学においても、エスニックな現象は早晩、資本と賃労働の対立に起因する階級闘争の中へ解体・吸収されてしまうはずのものと考えられていた。

人類学の場合、文化、エスニック・グループ、言語、地域などの一致を暗黙の前提に理論が構築されてきたということができるだろう。つまり、他とはっきり弁別される孤立した自足的な「社会」という像が立論の基礎に存在し、多エスニック社会は事実上例外的なものとされてしまった。したがって、「同化」「統合」「アマルガム化」などの諸概念を用いて、文化接触・文化変容研究というかたちでスタティックなパースペクティヴをもってしか、エスニック・グループとその相互交渉過程を扱うことができず、結局、エスニック・グループの成員であることの重要性とそのダイナミズムを見逃してしまったのであろう[4]。

脱工業社会の到来、あるいはポスト・モダンと形容される今日の社会の質的変容は、経済と産業、政治と行政から保健医療、宗教などに至るまで社会の様々な分野で生起しつつある。この複雑な過渡期の変化の流れを一言で要約することは難しいが、社会の中心部を占める組織され近代化された公式的セクターと、非組織的な非公式的セクターとの関係が差別的分業から対抗的分業へ転換してゆく傾向が指摘できよう。非組織的で非公式的なセクターとは非近代的、反近代的、脱近代的セクターであって、社会の周辺部を占める[5]。本稿の目的は、このような文脈のなかで、非公式的セクターの一種の挑戦としてエスニック・グループの活性化を理解しようとすることである。

Ⅱ　エスニック・リバイバルとは何か

（一）　規模

ところでエスニシティの復活・活性化、あるいはエスニック・コンフリクトの噴出といっても、私たち日本人には直接理解しにくい。そこでまず最初に世界各地の例を俯瞰することで、その規模と深さを確認することにしよう。

一九七一年現在で一三二の独立国のうち、①民族的に同質な人口からなる国家は一二ケ国のみしかなく、②人口の九〇％以上が一つのエスニック・コミュニティで占められている国は二五ケ国、③他の二五ケ国では人口の七五―九〇％が一つのエスニック・コミュニティで占められているにすぎない。そして、④三九ケ国（二九％）で、最も大きなエスニック・グループが多くみても人口の五〇％を構成しているにすぎず、⑤五三ケ国（四〇％）は人口が五つ以上の下位集団に分かれているという[6]。さらに具体的にみてみよう。

比較的大きな規模のマイノリティーを国内に含む例をあげるだけ

でも以下のように長大なリストになるのである。

カナダ、アメリカ合衆国、メキシコ、ブラジル、ペルー、トリニダード、ボリビア、ガイアナ、パラグアイ、エクアドル、イギリス、フランス、ベルギー、スイス、スペイン、ユーゴスラビア、ルーマニア、チェコスロバキア、ソビエト、キプロス、イラク、イスラエル、ヨルダン、シリア、レバノン、サウジアラビア、エジプト、トルコ、イラン、パキスタン、アフガニスタン、インド、ビルマ、スリランカ、中国、マレーシア、インドネシア、ヴェトナム、ラオス、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランド、モロッコ、アルジェリア、スーダン、エチオピア、ケニア、ウガンダ、タンザニア、ザンビア、ジンバブエ、南アフリカ、ナミビア、アンゴラ、コンゴ、カメルーン、ナイジェリア、ガーナ、コートジボアール、シェラレオネ、セネガルなどである(7)。このリストは決して網羅的なものではなく、今日、何らかのエスニック・コンフリクトあるいはエスニックな運動をその内部にもたない国家は非常に少数にすぎない。

(二) エスニック・ストラテジー(8)

それではこのように広範な国々にわたるエスニック・リバイバルの内実はどのようなものだろうか。つまりエスニック・グループ自体は太古より存在したわけであるが、今日のその復活・活性化において何が目標に据えられ、どのような方向が目指されているのかということである。その特質と含蓄を解釈するための試みは次節以下でおこなうが、当面の理解を助けるために、様々なタイプのエスニック・リバイバル（のとる戦略）を類型化し概観しておこう。最初に全体の趨勢を指摘すれば、今日のエスニック・リバイバルで採られている戦略が、積極的・攻撃的な性格を強めていることである。エスニック・コミュニティあるいはエスニック・グループ自体は有史以来存在してきたわけだが、常にそれらは孤立志向と政治的拡大志向のあいだを揺れてきた。現代では、政治的拡大を目指しはしないまでも、ごく小さなエスニック・コミュニティでさえも、こぞって攻撃的な戦略を採用していることがその著しい特色である。つまりここに見られるのは、自己充足的で内向的で静的なエスニシティから、より開かれ動的な、そして多元性に準拠するエスニシティへの変化なのである(9)。本稿の意図するのは、エスニック・リバイバルに焦点を定めることで、このエスニシティの性質の変化を理解しようとする試みである。また同時にこの作業の過程で、非常な錯綜をきわめるエスニシティの概念規定の問題に、一定程度の整理を加えることを目指している。

多岐に分化し複雑な様相を呈するエスニック・リバイバルを類型化する試みは、多くの論者によってなされているが、ここではその多様性を確認しその戦略の推移を概観することを第一の目的として、比較的素朴な類型を用いよう。何故ならいかに精緻なものであっても、タイポロジーの構成に終始するだけでは、エスニシティが生成する動的な過程を十分に理解することはできないからである。

①孤立主義。すでに言及したように、かつて小規模なエスニック

・コミュニティは多くの場合このタイプの戦略を採っていた。これは最も消極的な戦略であって、あるエスニック・コミュニティがそれを包摂する全体社会とは没交渉に生きることを志向するものである。中世ヨーロッパのユダヤ人、植民地化以前の東南アジアの華僑、ベドウィン、アルメニア人などがこの類型にはいるであろう。これは次の適応主義とともに、今日のエスニック・リバイバル以前のストラテジーとして理解されるべきものであろう。

②適応主義。このタイプは、当該エスニック・グループの成員がホスト社会の社会・政治生活に参加し適応することを目標としている。アメリカ合衆国の白人エスニック・グループの大多数の二世がそうであるように、エスニック・グループの個々人は自分自身の上昇移動を志向して、ホスト社会の諸価値に同化しようと試みる。かれらは父祖たちの防御的な、しかし集団志向的な価値を、ホスト社会に切り込むために個人の決断で脱ぎ捨てた。この選択を支えたのは、とくにアメリカ合衆国に顕著であるが、西洋社会一般に共通する流動性と自由が、かれらに富と威信の階梯を昇ることを許すという信念である。しかしながら一般的にいって、かれらもエスニックな絆から切れることはなかった。非常に困難なことであったが、かれらは、職業や政治にかかわる公的世界と、家族生活や文化にかかわる私的世界という二重の世界を生きなければならなかったのである。

③コミュナリズム。いくつかの点でこれは、よりダイナミックで積極的な適応主義にすぎないが、適応の基礎単位として集団が想定される点が前者と異なる。つまり、エスニック・グループが人口的に多数を占める地域で地方政治をコントロールすることを意図しているのである。アメリカ合衆国で黒人が人口の多数をしめる都市部において、この要求の高まりの好例を見ることができるであろう。この要求がさらに高まると国家レベルでの認知を求め、エスニック・グループは圧力団体として行動し始めるのである。この戦略の包括的目的は、当該エスニック・グループが自集団の利益に沿うように国家の政策に影響を与えようとすることである。

④自治主義。多様な形式のそして様々な程度の自治主義が存在するが、そのなかでもっとも重要なのは、文化的自治主義と政治的自治主義である。文化的自治主義は、エスニック・グループの文化生活の全局面（とくに教育、マス・メディア、法廷）を、エスニックな諸価値によって充分にコントロールしようとするものである。政治的自治主義はこれに加え、外交、軍事をのぞく社会・政治・経済生活の全局面を包含しようというものである。理念上、自治主義者は連邦制を要求するが、この戦略はスコットランド人、ブルターニュ人、カタロニア人のように、領土という基盤をもったエスニック・コミュニティにしか開かれていない。いいかえれば、自治主義を目指す運動はエスニック・コミュニティの政治的アイデンティティを主張しながら、全体社会との結び付きを維持することから得られる利益を確保しようとするのである。今日では、文化的権利の確保というミニマムな自治主義から「ホーム・ルール(home rule)」を確立した連邦制というマキシマムな自治主義にいたるまで、自治に

関する広範囲な戦略が様々なエスニック・グループによって採られている。

⑤分離主義。この戦略は、スコットランド国民党、ケベック党、バングラディシュのベンガル人、クルド族、イボ族などによって追求され、民族国家的(ethnonational)自決の達成を政治的目標とする。今日ではあからさまな分離主義は稀であって、おもにアフリカとアジアに限られているが、ヨーロッパの地域＝民族運動のなかにも一つの選択肢として存在し続けている。なおこのタイプのバリエーションに「ダイアスポラ（diaspora）」運動とよばれるものがある。この運動の目的は、父祖の故地から四散を余儀なくされたエスニック・グループの成員を再結合しようとするものである。アルメニア人、ギリシャ人、ユダヤ人、中国人、アメリカ合衆国の汎アフリカ黒人運動などを好例としてあげることができる。

⑥イレデンティズム（Irredentism）。これは、分割され他の国家に吸収されてしまった部分をもつエスニック・コミュニティが失地回復を目指す運動である。例えば、バルカン半島や東欧のブルガリア人、ポーランド人、ギリシャ人などがそうであるように、失われた土地と人々を回復し再統合しようとする運動である。また、今日ではソマリ族、クルド族、パサン人などにもこのタイプの運動を見ることができる。イレデンティズムのバリエーションに「汎――」運動（'pan' movement）があるが、これはいくつかの文化的に相似た国々が国家をこえた連合を目指すものである。汎ゲルマン主義、汎スラブ主義、汎アラブ主義などがよく知られているが、全体としてこの戦略はあまり成功していない。

ここまで概観したように今日のエスニック・リバイバルの趨勢は、孤立主義的、適応主義的戦略から、コミュナリズム的、自治主義的、分離主義的、そしてイレデンティズム的な戦略に推移している。この推移のなかに見られるように、より能動的な戦略の意識的な採用が、今日地球上のいたるところで非常に多くの人々を動員し、エスニック・リバイバルを顕著なものとしているのである。このような傾向が注目を集めるにつれ、エスニシティに対する手段主義的・動員主義的アプローチとよばれる視点が、エスニック・リバイバルを理解するための試みとして、次第に伸長してきたということができるだろう。次節ではエスニック・リバイバルを理解するための多様な理論的視点を再検討することからはじめよう。

Ⅲ　エスニシティのダイナミズム

（一）「原初主義」対「手段主義」

これまで述べてきたような世界的規模のエスニック・リバイバルの噴出を分析・理解するために、七〇年代以降多種多様な理論的な試みがなされた。多くの論者をまきこんだこの理論整備の過程で、「原初主義」（primordialism）的アプローチと、「手段主義（instrumentalism）」的アプローチの二極が折出されてきたということができるだろう。本稿はこの二分法を再検討することから始めて、今日のエスニシティがはらむ新しい特性、あるいはエスニシティの変化につ

いて言及したい。

原初主義はエスニシティの表出的役割を重視し、近代化、社会状況の変化によって変わることのないエスニックな紐帯の情緒面における強靱さ、「原初的愛着（primordial attachments）」を強調する立場である。シルズによれば、原初的愛着は、親族、土地、宗教などに随伴する強力で包括的な一体感、強制、情熱、神聖などによって特徴付けられている[10]。シルズは原初的愛着の独自性と重要性を指摘したが、それ以上議論を展開しなかった。シルズの議論を発展させたのはギアーツである。彼は、脱植民地後の新興国におけるネイション・ビルディングを分析する際の鍵概念として原初的な忠誠という概念を活用した[11]。ギアーツによれば、原初的紐帯とは、社会的存在の「所与」性から生まれるものを意味している。つまり主に、直接的接触と血縁関係を意味するが、さらに、特定の宗教集団に生まれたということ、特定の言語、場合によっては一つの方言、あるいは特定の社会習慣に従うといったことに由来する所与性を意味する。「血とか言語とか習慣といったものを同じくするということはそれだけで、口では言い表せない、ときには圧倒的な強制力をもっていると考えられている。事実上、人は血縁者、隣人、宗教を同じくする人びとに縛られている。それは個人的情愛や実際上の必要性とか共通の利害あるいは課せられた義務の結果であるだけでなく、少なくとも大部分はその紐帯そのものがもっている何らかの計り知れない絶対的な重要性のためでもある」[12]。原初主義的アプローチの形成に、ギアーツのこの議論が要石となったのであった。

原初主義的アプローチをとる他の論者として、H・アイザックス[13]、J・M・インガー[14]などをあげることができる。H・アイザックスは、「基本集団アイデンティティ（basic group identity）」という概念でエスニシティの所与性と情緒面における強靱さを強調している。アイザックスによれば、基本集団アイデンティティは、主要なものとして身体と名前を構成要素としているが、彼は名前について次のように述べている。「新生児は、個人名、家族名、集団名を獲得する。新生児は自分が生まれた集団の歴史と起源を獲得する。集団の文化と過去は、新生児に民族性、言語、宗教、価値体系などを自動的に付与する[15]。」J・M・インガーは、現代社会の急激な社会変化と流動性、そして普遍的、合理的、手段的価値が支配する今日の社会状況を強調することで、孤独な現代人のアイデンティティの喪失を癒してくれるよりどころとしてエスニシティをとらえた。

要約すれば、原初主義的アプローチは、エスニシティの情緒的基礎と、エスニックな紐帯の持続性を理解するためにはきわめて有効であるが、心理的還元主義であること、政治的経済的影響の無視などによって、社会変化を説明できないことから、エスニックな現象の包括的理論的な説明に失敗すると評価されることが多い[16]。この原初主義批判の立場が手段主義の基調をなしている。手段主義を概観してみよう。

手段主義的・動員主義的アプローチの特徴は以下のように要約できるだろう。今日次々に噴出するエスニック・コンフリクトやエス

ニック・グループ間の緊張は、原初的感情によって説明されるべきでなく、それは社会的、政治的、物質的希少資源を獲得せんとして、エスニックなシンボルを動員している、諸個人や集団の意識的努力によって引き起こされると理解する立場である[17]。したがってこの視点をとるものは、エスニック・グループを利益集団と見なすことが多い。

近年、エスニック・グループ間の競合関係に力点をおき手段主義的立場に立つ論者が目立つが、A・コーエンがその先駆けであると目されている。コーエンは自身の西アフリカ都市の調査[18]に基づいて次のように述べている。現在の（アフリカ都市部における）エスニシティ（の高揚）は、エスニック・グループ間の強力な相互作用の結果生じたものであって、エスニック・グループの分離によって生じたものではない。エスニシティの高揚は、従来の社会関係や慣習のダイナミックな再編成を含み、既存文化が単に維持され連続していることの結果なのではない。エスニシティは基本的に政治現象なのであって、伝統的慣習は政治的駆け引きのためのイディオムとして、また機構として用いられるのである。人びとは慣習が違うといって互いに殺しあったりしないし、またときにはよその部族の奇妙な慣習をからかったりするが、それだけで深刻な抗争に陥ったりしない。文化的差異に基づいて実際に深刻に争うのは、それらの文化的差異が政治上の重大な分断に結び付いているときのみである。また逆に現在の（アフリカ都市部の）状況下では、相互の利益のためにのみ人びとは結集するのである。さらに注意すべきは、エスニック・グループは基本的にインフォーマルな集団であることである。それは国家の公的機構の下位区分を構成しているのではない。国家あるいは他の公式組織の枠組のなかで、エスニック・グループが政治的行動のためにそれ自身を非公式な組織にかたちづくるときのみ、われわれはエスニシティを研究しているということができるのである[19]。

コーエンは、結局、エスニシティを程度問題としてとらえるが、彼によれば、エスニック・グループは、①いくつかの規範的行動様式を共有し、②全体社会の枠組みのなかで他の集合体の成員と相互作用を営みながら、より広範な社会の一部分を形づくっている人びとの集合体である。そして、エスニシティという用語は、集合体の成員が社会的相互作用の過程で、共有している規範にしたがう程度を指している。またそれは基本的に、共通の社会的文脈のなかで影響しあっている文化集団間の相互作用の形態を示している[20]。

コーエンが「規範的行動様式」と言うときに考えているのは、親族や結婚、友情、儀礼、その他いろいろな儀式などの場で見い出されるシンボリックな形式や行為なのである[21]。コーエンの解釈するエスニシティは、操作可能で社会状況に敏感に反応する動的な性質を帯びているのである。この点で原初主義的な理解と鋭い対照をなすのである。原初主義では、一般的に、例えばアイザックスがそうであったように、エスニック・グループの存立の基盤である原初的紐帯が、共通の出自、言語、地域、宗教、慣習などの客観的属性によって規定されると想定しているのである。

（二）原初主義再考

近年のエスニシティをめぐる理論的研究に共有される枠組として、ここまで用いてきたような原初主義と手段主義を対比させる二分法的な整理がよく用いられている[22]。たしかに、多岐にわたる理論を鳥瞰するうえで、この二分法に基づく理解は一定程度以上有効であるが、過度の図式化はときに誤るのではないだろうか。それはとくに原初主義を不当に評価する点で顕著であると思われる。すでにふれたことだが原初主義は次のように批判的に位置付けられていた。①原初的紐帯は所与性によって特徴づけられ、不変で動的特性を持ちえない。したがって、エスニシティを静態的にしかとらえることができない。②つまり現実のエスニシティの活性化と分かちがたく結び付いた、政治・経済的条件を無視してしまっている[23]。このような要約は、原初主義をエスシシティに対する常識的で伝統的な見解と見なすことと不可分に結び付いているし[24]、また一見したところでは、古典的で静態的な原初主義が、動的な手段・動員主義によって革新されたという印象を与えがちである。

さてここでは、原初主義の代表的論者の一人と見なされているギアーツの議論を再検討することから始めよう。ギアーツが「統合的革命―新興諸国における原初的感情と市民政治」[25]で問題としたのは、脱植民地化を達成した新興国における政治的統合の問題であった。彼によれば、新興諸国の独立後の難渋をきわめる政治的発展過程を理解しようとすることは、共同体的忠誠と政治的忠誠の関係を対象に研究することであり、「ネイション」「ナショナリティ」「ナショナリズム」といった言葉は問題をぼかすばかりだという。新興諸国の抱える様々な問題は、「二元」「復元」「多元」的社会とか、「モザイク的」「複合的」社会構造、あるいは、「ネイション」でない「ステイト」、さらには「部族主義」、「地域主義」、「自治主義」、そして各種の汎民族運動といった様々な用語によって表現されてきたが、これらはすべてある意味でまったく同一の明確に規定される研究分野をなしているという。つまり、共同体的忠誠と政治的忠誠に注目することで、新興国の人びとを同時に駆り立てる二種の強力な動機とその関係を考察することができるというのである。ギアーツによれば、その二つの動機は相互に全面的に依存しているがまったく別個のものでしばしば対立している。一つはアイデンティティの探究であり、自分達のアイデンティティが重要な意味をもつものとして認められたいという願望である。つまり自分たちは自分たちの願望、行為、期待、意見が重んじられるにたる存在だということの社会的自己主張なのである。これは原初的感情に根ざした動機である。もう一方の動機は、進歩、生活水準の向上、より効果的な政治体制、社会正義の拡大といったことに対する要求であり、効率的で活力あふれる現代国家を建設したいという欲求である。この二つの動機はきわめて密接に関係しているが、別の源から発していて、両者の間の緊張こそが新興国を発展させる推進力の一つであり、同時にその発展を妨げる最大の障害となっているという。新興国の政治過程の多くは、それぞれが独自の方向へ進みがちなこの二つの意志を、何とか同じ方向に向けようとする努力を軸に展

開しているのだということになる[26]。

ここまでで確認したかったのは、ギアーツが原初的紐帯という概念を用いた文脈であった。原初的紐帯の本質論的考察はギアーツの意図したところでなかったことが以上の要約からも明らかであると思う。彼が試みたのは、共同体的忠誠つまり原初的愛着と、政治的忠誠の二極間で生じる強力な相互作用とその動態の分析であった。

もう一度ギアーツの議論に戻ることにしよう。彼は原初的紐帯を概念規定したすぐその後で、続けて次のように述べている。原初的感情と国民としての感情の間の直接的な葛藤のなかで、原初的レベルでの不満が「実際に何を核として具体的な形に固まるかは様々であり、どの場合もたいてい複数のものが、ときには互いに矛盾するものが同時に含まれている[27]」。したがって、疑似的血縁関係、人種、言語、地域、宗教、慣習などを、いちおうの核として列挙することができるが、これは単なる記述のレベルのことでしかないと付け加えている。例えば、「慣習」の項では、激しく対立している集団間であっても、一般的な生活様式はほとんど変わりがないことがあるし（インドネシアのジャワ人とスンダ人の場合）、逆に、バリ島民の慣習はインドネシアのなかでもきわめて特異なものだが、なんら葛藤の原因になっていないと述べている[28]。そして、原初的紐帯に基づいた結束は、多くの新興諸国できわめて根源的な力を持ちながら、それは必ずしも常に活動しているわけでも、表面化しているわけでもなく、また原初的紐帯に基づくアイデンティティの獲得という明白な事実のなかに隠れ潜んでいて、好都合な社会的条件が調いさえすれば、すぐにでも政治的な形をとって表に現われるような特質に注意しなければならないとも述べているのである[29]。

以上のようなギアーツの議論と、さきに見たコーエンのそれがどれほど隔たっているのだろうか。ギアーツの場合ももちろん、原初的紐帯が政治的な重要性を帯びる現実の条件を非常に重視したのであった。

（三）エスニシティのダイナミズム

ここまで述べたことは、原初主義対手段・動員主義という二分法を壊すことではなく、この二分法的な整理に過度にとらわれることで見失いがちな、エスニシティのダイナミズムをもう一度確認することを意図している。

手段・動員主義的観点を極端に徹底させていった場合、エスニシティの特質として、原初的紐帯の持つ比類なく強力な情緒的拘束力を重視しなくなってしまうが、原初主義の主張は、このような見解に対する警告であるということができるだろう。

しかしながら、原初主義の代表的論者と見なされるギアーツの場合明らかであったように、この立場にあるとみなされる他の論者の多くも、エスニシティが社会・経済・政治的諸条件と無関係に、伝統的客観的文化要素によって、ただ静態的に規定されるとするものは稀れである[30]。実際、今日のエスニック・リバイバルのうちに見い出されるエスニシティの高揚は、単にいわば生活実態としての文化の差異に基づくのではなく、きわめて政治的な文脈のなかで、それ

に柔軟に呼応し生成する現象なのである。いわゆる原初主義論者も、この点を見逃していたわけでないことに注意しなければならないだろう。

今日のエスニック・リバイバルの核心をなすエスニシティは、原初的愛着に訴えることで表出的であると同時に、あわせて政治的な駆け引きの柔軟なイディオムとなりうる、手段的なエスニシティなのである。原初主義的なエスニシティ理解と手段・動員主義的なエスニシティ理解は背反するのでなく、一見矛盾するように見える性質をあわせ持つところに今日のエスニシティのダイナミズムがあるというべきであろう。D・ベルはこの点について次のように述べている(31)。象徴的な目的と手段的な目的を結び付けることのできる社会的単位が最も効果的なのである。現代政治史上、「階級」と「エスニシティ」が、凝集力のある集団感情と一貫した集団行動をあわせもつ二つの支配的な様式であることは明白である。しかし、第二次大戦後、産業対立は制度化し孤立化してしまったため、職業上の環境は労働者の個性と行動を形づくる能力を失ってしまい、もはや階級は強力な感情的紐帯をもちえない。エスニシティは、利益と感情的紐帯の結合を可能にすることで、非常に顕著なものとなってきたのである。他の社会的役割がより抽象的で非人格的になっていくときに、アイデンティティの基礎となる触知できる共通の手がかりを与え、また、政治的に実現されるべき社会をめぐる諸価値の競合のなかで、確固とした位置を主張するための手段となりうるのはエスニシティなのである(32)。

ここまで述べたところを補足しながら要約しよう。「階級の場合と同様に、エスニシティは、常に客観的な要因と主観的な要因の相互作用の産物なのである。ある状況についての主観的な定義は、急激にかつ根本的にエスニック・グループを取り巻く現実を変化させ、実際、新しいエスニック・グループを創出する。しかしながら、新たなエスニック・グループの創出は、その場しのぎでなされるわけではない。新たなエスニック・グループの定義は、いつでも先行する状況のうちに基礎付けられているのである。つまり、エスニシティは、原初的であると同時に非常に変化しやすいものなのである(33)。」

エスニシティの主観的側面の重視は、その今日の復興・活性化を「ニュー・エスニシティ」として理解すべきだという主張に最も明瞭に表れている(34)。「ニュー・エスニシティ」という用語の提起は、後述するように、客観的文化属性から任意で自由な、構成的なエスニシティの特質を強調するためになされたと考えられるが、しかし、手段・動員主義的観点からの理解を強く優先させるために、原初的愛着の存続に対する評価が充分なされていないのではないだろうか。この点に留意すれば、今日のエスニシティのダイナミズムに注意を換起する意味で、この用語を用いるのは有効であろう。すでに何度もくりかえし論じたように、エスニシティの特質の二極を包含しうる視点に立つことが必要なのである。この二極はいわば「二重らせん」的に絡み合い、動員上の戦略に原初的な力を充填し、また逆に、動員の成果いかんに依存しながら、核となる原初的

基質も構成し直されるというべきであろう。したがって問題は、実際にエスニシティのダイナミズムが発揮される局面、あるいはそれを促進する要因を考えて行かねばならないだろう。

Ⅳ　エスニシティと運動

（一）　政治運動と文化運動

客観的生活実態としてのエスニシティは、その差異が社会的に有意味でないかぎり、あたかも空気のように意識されることはないであろう。エスニシティに基づいて対立・競合する同レベルの他の集団が存在しないかぎり、あるいは、特定のエスニック・グループの成員であるか否かによって社会経済政治的な格差が生じないかぎり、それは生活のなかに沈潜し、いわば「眠っている」エスニシティであるはずである。しかし、今日世界各地で生起しているエスニック・リバイバルにおいては、他と区別される自己または自集団を規定するために、認知的カテゴリーとして意識的なコントロールのもとにエスニシティは利用されると同時に、その強靱な原初的な愛着が広範な人びとを種々の運動に動員する核となっているのである。たとえば、一九六〇年代初頭からアメリカ合衆国を揺るがせた黒人運動が好例であるが、エスニックな運動は常に一方において政治権力獲得闘争であり、もう一方で文化運動を形成することが理解できるだろう。黒人運動の場合、政治闘争は公民権の獲得を中心にこの時代になお根強い偏見・差別の打破をめざし、他方、文化運動はよく知られた「ブラック・イズ・ビューティフル」のスローガンのもとに、黒人独自の価値観（アフローアメリカ文化）の創造をめざし戦われた。「アフローアメリカン」という言葉には、民族的文化出自を明示しようという意味合いが込められ、彼らも他のヨーロッパ系移民の子孫たちと何ら変わるところのないエスニック・グループであるという主張であった(35)。しかし、アフローアメリカ文化の創造は、長い間失われねじ曲げられてしまった文化的歴史的遺産を何とか取り戻そうとする、苦難に満ちた自己発見の試みに他ならなかった(36)。当然のことだが、アフローアメリカ文化は彼らの故郷アフリカの文化から自然に派生したのでなく、アメリカ合衆国において意識的な努力のもとに創造されたのである。しかしながらそれは、原初的感情に強く訴える力強さを備えていたのである(37)。

エスニックな運動における政治運動と文化運動の二側面は、相補的な関係にある。文化運動は、通時的に連続する歴史的存在としての自己確認を求めるために、祖先や集団の起源と結び付くと推定される象徴への関心に導かれている。祖先や集団の起源と歴史は、ときには再発見され、ときには「創造」されたりするが、エスニック・グループの存立にとって決定的な重要性をもっているのである。このような再発見の過程には、明らかな「創造」と興味深い選択が含まれる。核となる歴史的事実は、ある場合には充分吟味されないし、ある場合には最小限しか存在しない。しかし、この最小限の事実が他の文化的諸事象を統合する基軸を提供するのであり、集団のアイデンティティの基礎と枠組を形成するのである。別の観点から

見れば、集団の最近の歴史はエスニック・アイデンティティのあり方を動機づけるが、遠く隔たった古代の歴史は集団に独自の存在理由、正当性、構成原理を与えるのである(38)。他方、集団をとりまく環境・現実の変革を志向する政治運動は、文化運動によって得られたエスニック・アイデンティティとその明確化、また新たな社会秩序のイメージに導かれるが、同時に、政治運動の成果はフィードバックされて、文化運動の内容と方向を再定義し、エスニック・アイデンティティを再構成するという二重の拘束がみられるのである。今日のエスニック・リバイバルを特徴づけるのは、まさにこのような動的なエスニシティの絶え間ない生成なのである。

(二) 国内植民地モデルとその批判

今日のエスニック・リバイバルの最も端的な特徴である、エスニックな運動の頻発を説明する試みのなかで、M・ヘクターによって提起された「国内植民地モデル」(39)は多くの論者の注目をあびてきた。ヘクターのモデルは多岐にわたり様々な批判を受けており(40)、もはやそのまま受け入れることはできないが、エスニックな運動を解明するための非常に重要な理論的基礎を提供したということができるだろう。したがって、ここではまずヘクターのモデルを概観し、後にいくつかの批判モデルを点検することで、エスニシティの復活・活性化と、エスニックな運動の連関の理解を試みることにしたい。

よく言われているように、ヘクターのモデルはA・G・フランクの「従属理論」(41)に示唆を受けて構築された。フランクは、ラテンアメリカ経済と西欧経済の間の不平等な関係を問題としたが、彼によれば、ラテンアメリカは「周辺的」「構造的低開発化」されており、その従属的依存的な性格は中核的な西欧経済の収奪に帰せられる。西欧経済の劇的な膨張は、周辺諸領域の物的資源と人的資源の双方にわたる搾取によってもたらされたのである。ヘクターは、ウェールズ、スコットランド、アイルランドのナショナリズム形成の歴史的分析にあたり、従属理論を一国内に当てはめたのである。多くの場合、特定エスニック・グループは、一国内の特定地域に集中しており、彼らの運命は、分ち難くその地域に結び付いている。この事実が意味するのは、支配集団によるマイノリティーに対する明白な差別の存在とは無関係に、自動的に地域間の不均衡はエスニック・グループ間の不平等の投影として理解できるということである。この観点に立てば、中核的な「ネイション・ステイト」の「国内植民地」として、エスニックな地域を扱うことはきわめて自然な理論の展開であった。

ヘクターによれば、周辺集団は工業化によってもたらされる利益を中核的集団と等しく享受することはできず、政治的にも意志決定権を奪われ、文化的にも中核への同化を強いられる。周辺集団は、中核集団の搾取構造に組み入れられ、恒常的な、「低開発化」を免れない。さらに、中核集団は、既存の社会成層システムの永続化によって、富と権力の不平等配分を維持しようと地位配分を操作し、自集団の成員のみに高位の地位を割り当てる。逆に、周辺集団の諸

個人は、そのような高位の地位への接近を拒否されるのである。「文化的分業」とは、階級のうえに明白な文化的差異が重ねられた成層システムなのである。文化的分業体制下では、たとえ両集団間の接触・交流が増大しても、両集団間の格差は縮減しない。両集団間の構造的不平等は、周辺が従属的な形態で「発展」するにつれ大きくなるのである。このような文化的分業とその帰結としての構造的不平等に対する反発として、周辺集団が分離主義的な動員を引き起こすとヘクターは論じたのである[42]。

ヘクターの国内植民地モデルに対する批判は多種多様である。ここでは、J・ナゲルとS・オルザク[43]のエスニックな資源動員論的な批判を紹介することで、またあわせて本稿全体の概括を試みることにしたい。ナゲルとオルザクによると、国内植民地モデルが描くところとはまさに逆に、文化的分業が崩壊するとき、はじめて諸集団間の競争が可能な状況が出現し、このときエスニックな動員は最も起こりやすくなるのである。つまり、中核と周辺の間の一貫した不平等が動員を生じさせるという仮説は容認し難く、反対に、不平等の縮減が、それによって利益を得る抑圧にされていたグループの間で動員を可能にするというのである。彼らによれば、このような動員を助長する局面は、次のようにとらえることができるという。①都市化、近代化にともなって、エスニック・グループ間の障壁が次第に低くなり、不平等が縮減するとき、（国内植民地モデルが描くのとは逆に）エスニシティは活性化する。（中核と周辺のパワー差の接近）②エスニック・グループ間の競合関係が、動員を促し、組織化を進展させ、組織の規模を拡大し、他方、エスニック・アイデンティティの「創発」・「復興」を含めエスニシティを活性化するとき、そして、③都市化・産業化などの近代化の諸傾向が、従来不利な立場に置かれていたエスニック・グループに対して、情報や資源や組織網を提供するときエスニックな動員は促進される。④したがって、エスニックな運動は、産業発展が顕著であり、中核から様々な影響が浸透し拡大する周辺において発生しやすい[44]。

そもそも、周辺集団は経済的にも文化的にも劣勢であり動員可能な資源を欠いている。と同時に抑圧の脅威にさらされているから、自力で運動をつくり出すことが困難である。それゆえ資源にゆとりのある外部からの支持が重要なのである[45]と、ナゲルとオルザクの理論を解釈すれば、例えば公民権運動をうまく説明できるだろう。公民権運動の成功には、多数の白人の支持、そして運動の成り行きを刻々全米に映し出した、テレビに代表されるマス・コミを通じての世論の支持が不可決であったと思われる。

ナゲルとオルザクの議論に返ると、彼らは今日のエスニックな動員には、「創発的」なエスニシティを核とするものと、「復活的」なエスニシティを核とするものがあり、いずれも「非伝統的な性格」のエスニシティとして特徴付けられるとしている。「創発的」エスニシティは、本来は多くの部族に分かれていたインディアンが、合衆国政府の抑圧的政策に対応するなかで発展させた、汎インディアン主義に見出したようなタイプのエスニシティである。これは、本来は、別のときには分裂し抗争していた、文化的に多様な集

団のうちに創発したエスニシティである。「復活的」なエスニシティは、アイルランドやバスクに見られるような、不活性化してしまっていたエスニシティが、エスニックな感情と組織を再生させる事例において観察されるエスニシティである。ナゲルとオルザクは、この二種のエスニシティ概念によってエスニシティの、異なった状況において異なった目的のために顕在化し、エスニック・グループ間の境界によって規定される、プロブレマティックで戦略的な性格を強調しているのである。

V まとめにかえて

ナゲルとオルザク流に、エスニックな動員の条件を中核と周辺のパワー差の縮減ととらえるにしろ、あるいは、外部からの支援による資源の流入・連帯を想定するにせよ、運動を形成する諸エスニック・グループは相互に対抗・敵対する集団と密接な相互作用を持っていることを述べているわけである。今日の経験的現実において、これは何を意味するであろうか。この点を明らかにすることが、今日のエスニック・リバイバルの特徴と、それを支えるエスニシティのダイナミズムを理解する鍵である。このような問題意識をもって、もう少しエスニックな運動を点検し本稿を結びたい。

今日のエスニックな運動の新しい点は、世代の交代が進み、客観的にエスニックな特徴を持たない人びとが運動を主体的に担っていることである。運動の担い手は、客観的文化的には中核に同化し、あまり違いのない生活様式を体現している。「彼らは、その祖先が属した民族の一員であるというよりは当該社会に属し、彼らの運動も、……当該社会内部での改革運動であることが多い。その基礎には、当該社会内部の同輩者との相違というよりは、むしろ逆に共通性が存在する。共通の市民、共通の人間という視点からみて、……存在する社会的・民族的差別が許せないのである。当該社会の同輩者が準拠集団として選ばれない限り、彼らとの必ずしも大きくない（エスニックな）相違が問題となることはない」(46)。

今日のエスニック・リバイバルを特徴付ける動的エスニシティは、諸エスニック・グループを包含する全体社会のなかで、客観的な文化的同化と矛盾しないで追求されるエスニシティなのである。

以上、本稿では、論じ足りないところまた論じ残っているところも多く、現代社会の大問題であるエスニシティの限られた側面にふれたにすぎないが、今も刻々生起しつつある経験的現実との絶え間ない対話をさらに試みてゆきたい。

注

(1) 個々の業績には、本論中で必要に応じふれるので、ここではエスニシティ論研究を特集した二つの雑誌を紹介することにとどめる。『民族学研究』第四八巻、第四号、一九八四年、は「民族問題の周辺」を特集している。『文化人類学』第一巻第二号、一九八五年、特集「民族とエスニシティ」（アカデミア出版会）。

(2) ここで用語の整理をしておくと、本稿では、「民族」を英語の ethnic group・ethnic community・ethnicity の意味で用いるが、日本語の「民

族」とこれらの概念の間にはずれが存在する。「民族」は一般的に nation の意味に用いられるより広義の概念である。したがって概念上の混乱を避けるために、消極的な解決策であるが、日本語の「民族」の一語で通さず、適宜使い分けていきたい。

また、ethnic group・ethnic community・ethnicity などの諸概念については、本論のなかで明確にしていきたいが、ここでは暫定的な定義をあげておく。「ethnic groupあるいは ethnic community(＝'ethnie')は、①集団独自の起源を共有するという意識、②集団独自の歴史の共有とその運命に対する信仰、③一つ以上の集合的な文化的独自性の共有、④独自の集合的連帯感の共有、の四点によって特色付けられる」(Anthony D. Smith, *The Ethnic Revival*, 1981, Cambridge University Press, p. 66)。なお、ethnic group と ethnic commnity を併記するのは Smith の用法にしたがっているが、その意図するところは、全体社会を構成する下位集団としての ehnic group ばかりでなく、近代的国民国家の原形となったような全体社会レベルにわたる ethnic commnty を視野に取り込もうとするからである。また、ethnicity については、とりあえず ethnic group の特質を表現する概念であるとしておこう(A. D. Smith, *op. cit.*, とくに p. 65)。

(3) M. Elaine Burgess, "The Resurgence of Ethnicity : Myth or Reality?", 1978, *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 1, No. 3, p. 272.

(4) *Ibid*, p. 272 また Fredrik Barth, "Introduction", in Barth(ed.), *Ethnic Groups and Boundaries*, 1969, Boston, Brown, and Company, p. 10.

(5) 塩原勉「現代日本における組織化の諸形態」、一九八七年、『組織学会昭和六二年度年次大会報告要旨』、一九一二二頁。

(6) A. D. Smith, *op. cit.*, p. 9-10.

(7) *Ibid.*, p. 10.

(8) *Ibid.*, pp. 15-17.

(9) *Ibid.*, p. 17.

(10) Edward A. Shils, "Primordial, Personal, Sacred and Civil Ties", 1957, *British Journal of Sociology*, Vol. 8, pp. 130-145, (Reprinted in P. Rose (ed.), *The Study of Society*, 1967, Random House, pp. 178-192.).

(11) Clifford Geertz, "The Integrative Revolution : Primordial Sentiments and Civil Politics in the New States", in C. Geertz (ed.), *Old Societies and New States*, 1963, The Macmillan Company, pp. 105-157. なお一部増補されて C. Geertz, *The Interpretation of Cultures*, 1973, Basic Books, INC. pp. 255-310. に収録。

(12) *Ibid.*, (1973) p. 259. (C・ギアーツ／吉田禎吾他訳『文化の解釈学』Ⅱ、一九八七年、岩波書店、一一八頁。)

(13) Harold R. Isaccs, "Basic Group Identity : The Idols of Tribe", in N. Glazer and D. P. Moynihan(eds.), *Ethnicity : Theory and Experience*, 1975, Harvard University Press, pp. 29-52.

(14) J. Milton Yinger, "Ethnicity in Complex Societies : Structural, Cultural, and Characterological Factors," in L. A. Coser, and O. N. Larsen (eds.), *The Use of Controversy in Sociology*, 1976, Free Press, pp. 197-216.

(15) H. R. Issacs, *op. cit.*, pp. 32.

(16) James McKay, "An Exploratory Synthesis of Primordial and Mobilzationist Approaches to Ethnic Phenomena", 1982 *Ethnic and Racal Studies*, Vol. 5 No. 4, p. 399.

(17) *Ibid.*, pp. 399-401.

(18) Abner Cohen, *Custom and Politics in Urban Africa*, 1969, Routledge and Kegan Paul.

(19) *Ibid.*, pp. 198-200.

(20) *Ibid.*, pp. 3-6. 及び A. Cohen, "Introduction : The Lesson of Ethnicity", in A. Cohen(ed.), *Urban Ethnicity*, 1974, pp. Ⅸ—Ⅹ, pp. Ⅻ—Ⅳ.

(21) A. Cohen, *op. cit.*, (1974), p. Ⅹ.

(22) 明示的にこの二分法を用いるものを何点かあげておく。M. E. Burgess, *op. cit.* 李光一「エスニシティと現代社会」、一九八五年、『思想』第七三〇号、一九一一二〇〇頁。梶田孝道「エスニシティと地域運動」、一九八五年、『思想』第七三七号、三七一七七頁。吉野耕作「民族理論の展

開と課題」、一九八七年、『社会学評論』第一四八号、二―一七頁。

(23) J. Mckay, *op. cit.*, pp. 397-399. 李光一、前掲、一九八―一九九頁。

(24) 吉野耕作、前掲、四―六頁。

(25) C. Geertz, *op. cit.*

(26) *Ibid.*, (1973), pp. 255-259. (C・ギアーツ／吉田禎吾他訳、前掲、一一二―一一八頁。)

(27) *Ibid.*, (1973), p. 261 (前掲、一一一頁。)

(28) *Ibid.*, (1973), p. 263 (前掲、一一五頁。)

(29) *Ibid.*, (1973), pp. 263-264 (前掲、一一五―一一六頁。)

(30) 例えば、先述のインガーの場合も、異質性と流動性の高い社会におけるエスニシティの特質の解明には、利益の追求、下位文化の連続性の強度、アノミーと疎外の経験のおよぼす効果という、三要素間の相互作用に注意払わねばならないと述べている (J. M. Yinger, *op. cit.*, p. 210)。

アイザックスの場合は、本論で批判したタイプの純粋原初主義論者に近い。この類型の主張は、原初的愛着の本質理解をめざし、その源泉の探究から生じるということができるが、この点を含め原初主義の包括的な見直しの詳細は稿をあらためて論じたい。

(31) Daniel Bell, "Ethnicity and Social Change", in N. Glazer and D. P. Moynihan (eds.), *op. cit.*, pp. 141-174. (N・グレーザー、D・P・モイニハン／内山秀夫訳『民族とアイデンティティ』、一九八四年、三嶺書房、一九一―二三五頁。)

(32) D. Bell, *op. cit.*, pp. 165-169. (D・ベル／内山秀夫訳、前掲、二二〇―二二四頁。)

(33) Pierre L. van den Berghe, "Ethnic Pluralism in Industrial Societies: A Special Case?", 1976, *Ethnicity*, Vol. 3, p. 243.

(34) 江淵一公「象徴体系としてのニュー・エスニシティ」、江淵一公・伊藤亜人編『儀礼と象徴』、一九八三年、九州大学出版会、五一五―五四二頁。

(35) Talcott Parsons, "Some Theoretical Considerations on the Nature and Trends of Change of Ehnicity", in N. Glazer and D. P. Moynihan (eds.), *op. cit.*, pp. 53-83. 黒人問題については、pp. 71-75. を参照。および、明石紀雄・飯野正子・田中真砂子『エスニック・アメリカ』、一九八四年、有斐閣、四一―四六頁、二一七―二二九頁。グレイザー・モイニハン／阿部斉他訳『人種のるつぼを越えて』、一九八六年、南雲堂、二七―一二一頁。

(36) A. D. Smith, *op. cit.*, pp. 160-162.

(37) Michael M. Fischer, "Ethnicity and Post-Modern Arts of Memory", in J. Clifford and G. E. Marcus (eds.), *Writiting Culture*, 1986, University of California Press, pp. 194-233.

この論文は、もはや故郷とそのオリジナルな文化を知らない世代のアルメニア人、黒人、メキシコ人、インディアンの自伝の分析を通して、彼らの深層心理から噴出する現初的紐帯との一体感の希求を見事に描き出している。

(38) A. D. Smith, *op. cit.*, p. 68.

(39) Michael Hechter, *Internal Colonialism; Celtic Fringe in British National Development* 1536-1966, 1975, Univesity of California Press.

(40) A. D. Smith, *op. cit.*, pp. 27-42.

(41) Ander Gunder Frank, *Capitalism and Underdevelopement in Latin America*, 1967, Monthly Review Press. (A・G・フランク／大崎正治訳『世界資本主義と低開発』、一九七六年、柘植書房)

(42) M. Hechter, *op. cit.*, p. 39, p. 340.

(43) Joane Nagel and Susan Olzak, "Ethnic Mobilization in New and Old States: An Extention of Competition Model", 1982, *Social Problems*, Vol. 30, No. 2, pp. 127-143.

(44) *Ibid.*, p. 128, pp. 132-139.

(45) 塩原勉「資源動員論の位置」、一九八二年、『社会科学の方法』、第一六〇号、三頁。

(46) 梶田孝道、前掲、六九―七〇頁。